ポーランド国立図書館所蔵のショパンのプレリュード

作品28　自筆譜の資料的研究

A bibhographical study on Chopin´s Preludes op. 28 by autgraph note in Polish National Bibliotek

佐　藤　允　彦

Bibli. oteka Narodowa Mus. Cim. 93. No. 3826――これが、ポーランド国立図書館の所蔵するプレリュード、作品28のショパンの自筆譜につけられた図書ナンバーである。一般的には、同国の音楽出版局(註)1より1951年出版されたファクシミルに依ってこの存在が知られていたが、この自筆譜は、その作曲家の生涯に似て、実に数奇な運命をたどって、ポーランド国立図書館に所蔵されることゝなった。このファクシミル版は1951年、クラクフのP・W・M社がら出版されたもので、編集責任者のヴワディスワフ・ホルディニスキ教授(註)2が述べているように、原典の自筆譜が、何時、どのような経路を経て、何処からポーランドに買いとられたのかの詳細は、今もって不明のまゝである。このファクシミル版も、その後再刊を重ねては居らず、現在入手が非常に難しい。

多くの研究者が、国立図書館に所蔵されている自筆による研究よりも、このファクシミル版に依る研究に頼らざるを得ない現在、或る意味で、このファクシミルは一つの権威をもつ資料だと考えられている。戦後、国立図書館の自筆譜を研究した学者は、その閲覧者名簿からみると、ほんの数人にすぎず、如何に多くの学者がこのファクシミルに依存しているかを物語るものと知った。その程にまで信頼され、重要な研究資料だとされている割に、印刷技術のまずさから現物との相違点が余りにも多く、現物の自筆譜と比較することにより、筆者の資料としてこれまでファクシミルを検べてきた信頼度は極度にうすれてしまったことを、こゝに報告しておく。どの作曲者の作品を研究する場合でも、ファクシミルの持つ資料の精度は、80パーセントであれば上々の部に属するとも言えよう。ファクシミルでは、抹消され、書き消された文字でも、自筆譜で読みとれることや、等しく黒っぽいインクで書かれているように見える楽譜もそれぞれに違った色彩を、あざやかに残していて、それぞれの作品が研究者に語りかけてくる感じがある。いわば、ファクシミル版は立体感の全くない写真のコピーだといっても良い。

そのファクシミル版のまえ書きのなかで、編者のホルディニスキ教授は、自筆譜の入手の時期、購入の経過、保存責任その他についても、一切不明であるとしている。全く謎に包まれた

ともいえる自筆譜だが、プレリュード全28曲の自筆譜は、現在に立派な皮装釘を施され、紙製のハード・ケースにおさめられている。最初から、装訂されていたのではなく、当初は、バラバラになって、簡単にまとめられていた模様である。従って、その各リーフの散逸を恐れて、後に現在の様に一冊のアルバムに装訂されたもので、装訂者も、装訂の時期も明らかである。この装訂者とその時期が、ポーランドに買収された時期を解く錠の一つを掴っているともいえる。

この自筆譜は、ポーランドの国立図書館の記録では、次のように記録されている。

〝Fryderyk Chopin, 24 Preludia op. 28 Autograf. Wykonczony w latach 1839/9. Opracowala i Konserwacja; Prof. Bonawentura Lenart Warszawa, w latach 1940～1942″

（訳：フリデリック・ショパン、1838～39年に完成された24のプレリュード、作品28、自筆譜。1940～42年、ワルシャワのボナヴェンドゥーラ・レナールト教授[註3]に依り製本装訂）。

上記の記録の中にも若干の問題はある。製釘者のレナールト教授は、ワルシャワ美術大学の教授で、古書の装訂や破損の補修にかけては第一人者であったという。その技術を修得するためにローマに留学し、そこで技術をマスターした人である。ショパンの自筆譜の補修にも、破れにく、補修のために最適な、日本製の和紙を用いて裏打ちしたりしている。又、製訂の時期、1940～42年という時期は、ポーランドにとって全く悲劇的な時代で、ナチス・ドイツのワルシャワ駐留時にその補修作業を完成している。

問題の入手・購入の経路・経過についての詳細は、全く判らない。現在、ポーランド国立ショパン協会のアルヒーブ、又は国立図書館に所蔵されている多くの自筆楽譜の場合は、ライプチッヒ・ブライトコップ社[註4]から購入されたものが多く、こうした出版社の所蔵していた自筆譜の場合には、表紙や楽譜の空欄、又は下部の空白部分に、所有者であったブライトコップ・ウント・ヘルテル社のアルヒーブのスタンプが押印されているものが多い。こうした楽譜の場合には、その入手の時期、購入価格等が記録されているが、このプレリュードの場合には、何のマークも認めることはできない。又、自筆楽譜には、楽譜第一頁の上部右半分に、

24 Preludes pour le pianoforte dediés á son ami J. C. Kessler par F. Chopin

という献呈文が記入されているものゝ、作品番号は書きこまれていない。

当初の約束として、このプレリュード集は、カミーユ・プレイエル[註5]に売渡されるはずであった。1839年1月22日マジョルカのヴァルデモーザよりユリアン・フォンタナ[註6]に宛てた手紙[註7]には次の様に書かれている。

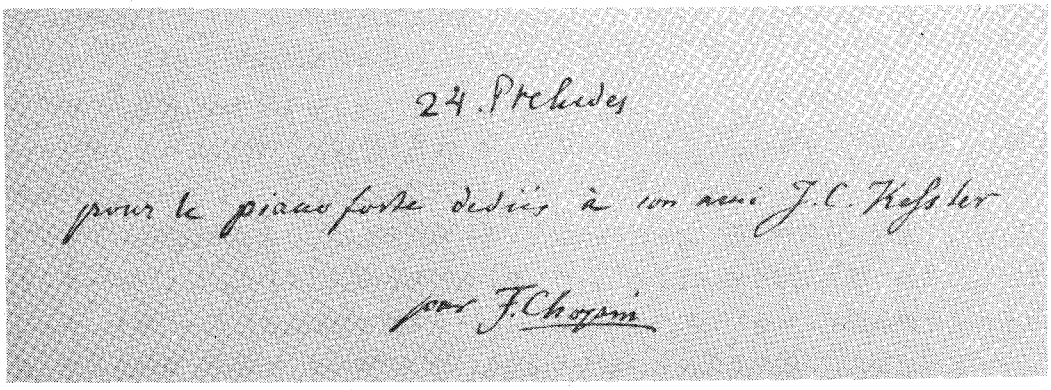
「君にプレリュードを送る。君とヴォルフ[註8]で写譜してくれ給え。間違いはないと思う。写譜をプロブスト[註9]に、そして手稿をプレイエルに渡してくれ。プロブストからのお金は、プロブスト宛の代理受取証明と受領証は君が持っているのだから、直ちにレオ[註10]のところに渡して欲しい。彼にお礼の手紙を書く時間がないのだ。それからプレイエルが君に渡すお金で、これは1500フランだ。〈中略〉二・三週後にバラードとポロネーズ・スケルツォを受取るだろう。」

この手紙から判断すると、プレリュードについては、ショパン自身の自稿譜と、フォンタナとヴォルフの写譜による三通りの手稿がある筈である。彼の指示によると、ショパンの自稿は、プレイエルに渡された筈である。モーリス・ブラウンの説(註)11に依れば、この楽譜には、沢山の変更があるとしているし、この自稿はフランスの出版社カテラン社(註)12に渡されたものであるとしている。フォンタナのコピーはブライトコップ社に、ヴォルフのものは従って英画版(註)13に渡されたことになる。フォンタナの写譜は、ショパンの筆跡に非常に良く似せて書いてあり、これ迄自筆譜と見間違えられたことも度々あったと聞いている。然し、研究の進んだ今では、もうフォンタナの写譜とショパンの自稿が見誤られることは、まずないといっても過言ではない。ところで、プレイエルに渡された楽譜は、版権をカテラン社に売られ、作品番号を付けずに出版されること、なったが、英・独・仏の各版共に作品番号をつけていない。これも、彼が作品何番をつけるのか忘れてしまったゝめ、作品番号なしで送ってしまった結果である。

1839年3月末、同じフォンタナ宛(註)14の手紙に依ると、

「僕のプレリュードがプレイエルに献呈されていたら、大変有難いのだが。（未だ出版されていないのだから、まだ時間はある）それから、バラードはロベルト・シューマン殿(ミスター)に、ポロネーズは君に、未出版なら。ケッスラー(註)15には何もない。」

と書かれている。売却する予定だったプレリュードはプレイエルに献呈され、ショパンの自筆に依って献呈されているケッスラーには、ぶっきらぼうに、「何もない……」と断っている点、この間の彼の心に動揺や、交友関係から何枚、献呈がそのように変っていったかを解明する必要がある。いづれにしても出版の時には、フランス版と英国版はプレイエルに献呈され、ドイツ版はケッスラーに献呈されている。こうした諸事実から判断すると、最初指示された通り、ショパンの自筆譜は、ケッスラーへの献呈文をつけながら、プレイエルに渡され、出版社が印刷する時点で献呈はプレイエルにされたものと考えられる。フォンタナのコピーは、ショパンの自筆譜と見誤られる程精巧にショパン風に仕上げられ、ブライトコップ社に渡され、その献呈の時のまゝでケッスラーに献呈されたものであろう。ショパンの自筆譜が、ブライトコップ社に渡されていたとすれば、先述のようにブライトコップ社のアルヒーヴの印が押印されてい


24 Préludes
pour le piano forte dédiés à son ami J.C. Kessler
par F. Chopin

る筈であるし、又、同アルヒーヴから何らかの手でポーランド側に購入されていたとするならば、その記録も現在残っている筈である。こうした証拠のない以上、余りよくないファクシミルから判断するとしても、ショパンの手紙にある指示から判断しても、ショパンの自筆楽譜は、プレイエルからフランスの出版社カテラン社に渡されたものとみることが妥当である。

ショパンの自筆の足跡は、その後不明である。カテラン社から初版譜が出た時点では、同社に存在していた筈である。その後献呈されたプレイエルに返還されたものか、或は1844年になってカテラン社は、シュレザンジェ(註)16に総ての版権を譲渡していることからみて、若しプレイエルに返還されていないとしたら、シュレザンジェに渡ったものかも知れない。

ホルディニスキ教授の説に依ると、この自筆楽譜は、第二次大戦中に国立図書館の音楽部長をしていたプリコフスキ(註)17に依って買いとられたものである、という説と、1939年にはもう既にポーランド側に買いとられていた説を述べている。この点、現在同国立図書館の音楽部長のマリア・プロコポヴィッチ(註)18女史に確かめてみたが、決定的な入手経路、価格、入手の時期に関する材料を得ることはできなかった。1940～42年の間に、自筆楽譜の装訂がされているという事実からみて、それ以前にポーランドに買い取られていたことだけは確かである。1943年、第二次大戦の末期にクラクフ市で催された〝ショパン展〟に、このプレリュードが出展され、その展覧会出品後、ドイツ兵に依って持ち出され行方不明になってしまった。終戦直後、クラクフ市のヤゲロニア大学の図書館で、レナールト教授のつくった外箱だけが見付かったが、中味はなく、1947年になってから、ショパンの他の遺品と共にシレジアのクウォジコで発見され、以来、再び国立図書館の国宝金庫に保存されている。

この楽譜をポーランドの誰かゞ購入したことについては、次のような推論が成立する。ポーランドのショパン協会は、1925年イグナツィ・ヤン・パデレフスキやイエジィ・ジュラブレフ(註)19教授等を中心に設立の計画がたてられ、翌26年には協会を発足させ、27年には第一回ショパン国際コンクールを開催している。現在も未だ元気に、ポーランド・ピアノ音楽界の重鎮の責を果していられるジュラブレフ教授のお話しによると、協会の事業はコンクールの開催だけでなく、浄財を集めて各地に散逸しているショパンに関する資料を協会の事業の一つとして収拾して研究し、研究の結果によって新ショパン全集を集成することであったという。1930年代には、この目的に従って多数の自筆楽譜が購入されている。この資料収集の時期に、恐らくはプレリュードも購入されたものと考えられる。ちなみにワルシャワ国立中央図書館の設立が、1927年であることも、大いに関係していること丶思う。又、先述のように、1939年にはもうポーランドにあったという説は、確実であろう。というのは、1937年9月1日にナチス・ドイツに依るポーランド進攻が行われ、第二次大戦の火ぶたがきられた年だけに、大戦開始以前の平和な時期に、自筆譜の購入が済んでいたと考える方が良いと思われる。いずれにしても、ポーランド国立図書館の所蔵するショパンの作品28、プレリュード全曲の自筆譜のたどった歴史、ポーランドの誰かに売られた時期も場所も、購入の価格も一切が不明のま丶である。資料として、そ

の出典を明確にしなければならない研究者にとって、この点実に残念であり、又、この辺りの研究も今後に残された資料研究家への課題の一つであるといえよう。

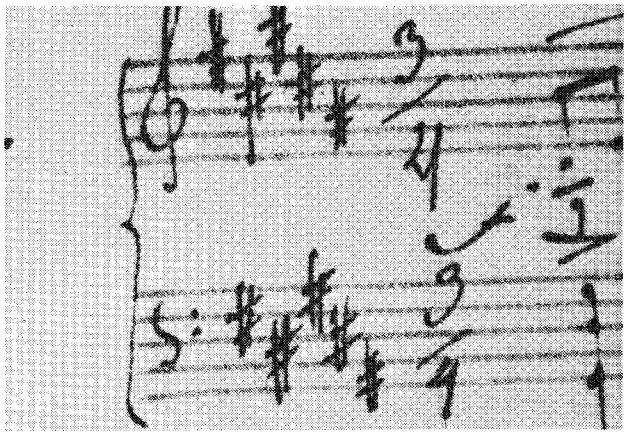
この研究の対称としたショパンの自筆楽譜について、私は先づ第一に自筆譜とされている権威を白紙にもどしてみるということから出発した。疑ってみるべき点は、数多くある。先程らい述べている通り、入手の時期も経路も明確でない点や、フランス版の献呈がプレイエルにも拘らず、自稿にはケッスラー宛ての献辞が記入されていること、作品番号の欠けている点等、これ等の資料調査の第一段階については、満足とまでは行かないが、それぞれにある程度の解答を与えることができている。こゝ迄の研究だけであるならば、ファクシミル版でも研究発展させることはできよう。問題の鍵は、真物のショパンの筆に依るものかという点である。

最近のショパン研究の進歩はすばらしく進んでいる。手紙の研究にしても、各時期に於けるショパンの手紙の文態の研究等も盛んに行われ、必然的に彼の筆跡研究もその専門とする研究家が居る。ルチアン・ファイエル(註)20やズヴィグニエフ・チェチョット(註)21、アンジェイ・ザハリアス(註)22等による筆跡の研究(註)23は、この研究のために大いに助けとなった。この筆蹟研究についても、この楽譜の真贋を見極めるだけではなく、更にどの時期に、どの作品が書かれたかを知るうえで必要な研究テーマの一つとなってくる。つまり、筆蹟から作曲の時期を推論していく技法を成立させることができる。プレリュートが作曲された時期についての確実な論文は未だない。多くの研究家は1831年から1839年の間とし、現在発刊されているモーリス・ブラウンの著書Chopin an index of his works は、ある程度権威ある研究書と認められ、モーツアルトのケッヒエルのように、ショパンの作品にブラウンのナンバーを用いている楽譜も多い。そのブラウンの研究に依ると、プレリュードは1836年から1839年の11月迄に作曲されたものだとしている。ブラウンの説は全く間違いで、作曲に着手された時期の問題は後で述べるとしても、1839年11月迄の作曲としているのは決定的な間違いである。ドイツ版は1839年9月に初版、フランス版は同年6月、イギリス版も同年8月に初版を出している事実からみて、彼の説の不正確さを物語っている。このブラウンの説はさておき、プレリュードに着手した時期、最初の曲はどれであるか、何時頃にプレリュードを曲集とすることにしたかという問題が必然的に生じてき、これ等の問題を解明する上でも、筆蹟鑑定は実に重要な研究技術の一つとなってくる。

ホルディニスキ教授によると、当初このプレリュードが装訂されていなかった時、そのリーフの状態からみて、1～4、5～10、11～14、15～18、19～22という5つのグループ分けができたとしている。(註)24これは各頁の連ながりを示しているだけであって、作曲の時期のグループ分けをしている訳ではない。かつ問題をもとにもどしてみると、1836年という年を限らずとも、ショパンがポーランドを離れた1830年11月2日以後、マジョルカに行った1838年末迄のショパンの作品に関しては、作曲の時期を明らかにすることのできるものは少ない。この約8年の間に、ショパンにとって最も重要だといわれている二輯のエチュード・作品10、作品25を含めて、プレリュードを更にその時期に加えると、エチュードもプレリュードもその各曲の作曲の年代

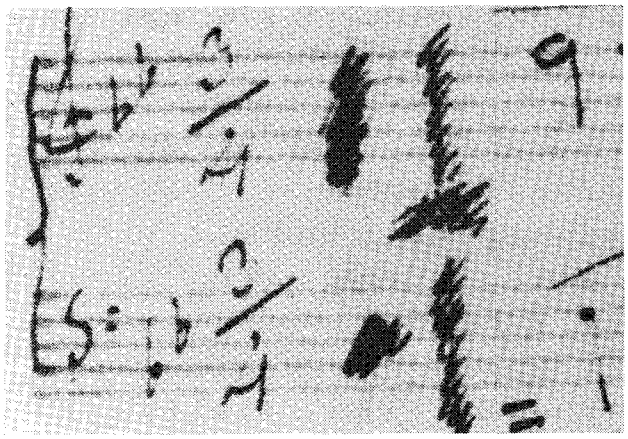
は全く不明なものばかりと言わねばならない。前述のブラウンの研究書にしても、プレリュード第七番イ長調、第17番変イ長調にインデックス・ナンバー 100をつけて、1836年の作としているが、この論拠が何処にあるのか実に薄弱な論点に拠っている。イ長調に関しては、1836年デルフィーヌ、ポトツカのアルバムに記入しているという事実、変イ長調に関しては、1837年フォンタナに宛てたメモの中に、〝変イ長調プレリュードを書き出して欲しい。ペルテュイスにあげたいから……〟と書いている事実をその論拠としている。これだけでは、この二曲に限って1836年に書かれたとするには、あまりにも薄弱な理由であるといえる。

研究上最も困ることは、かなり筆まめなショパンも、このプレリュード集に関して特にその推稿状況についてとりあげた手紙のないことである。ショパンの手紙のみならず、ショパンに関するあらゆる手簡類を集拾したPIWの二巻の書簡集にも、プレリュードの推稿について参考になる手がかりは得られない。アプローチすることは実に困難である。ショパンの作品中、特に先述のように「作品番号は何番を予定していたかを忘れたから」作品番号なしのまゝ送っている事実」からみると、その前後の作品が問題になり、又、友人として終生ショパンのために奉仕した人ともいえるフォンタナが、写譜を依頼された時に、プレリュードに与えるべき作品番号を知っていた筈であるという仮説も成立する。だが、フォンタナが本当にショパンのために働きはじめるのは、これ以後のことであり、作品番号のことは知らなかったであろうし、番号をつけづに出版されていることは、理解できることである。もともと作品番号は作品の順につけられるものではなく、作品番号が作曲の時期と前後することは多い。然し、作品番号の何番を予定していたかを作曲者自身が失念していたということは、明らかに予定していた作品番号があり、それがこの作品を思いたった時期を示す糸口にもなるものでもあり、作品の成立に必然的に関係してくる。ブラウンは、プレリュードの計画は作品27が出版された1835年末に企画され、その数曲はそれ迄に作曲されていた、という説をたてゝいる。(註)25 だが、この説も実は成立しない。同じブラウンの著書は作品27の出版を1836年(註)26としており、この点ヴィエジニスキ(註)27やマードック(註)28の



●写真1

プレリュード、才12番の才一小節目の筆跡。この楽譜の筆勢は次頁の同じ数字の書体に較べると、明らかに違っている。特に4の筆の運びと、切れ込みが大きく、力強く書かれているものの例である。この書体と非常に酷似しているのが、才6番、9番、10番等で、数字が同じような筆勢で書かれているだけではなく、譜尾の書き方も同じである。

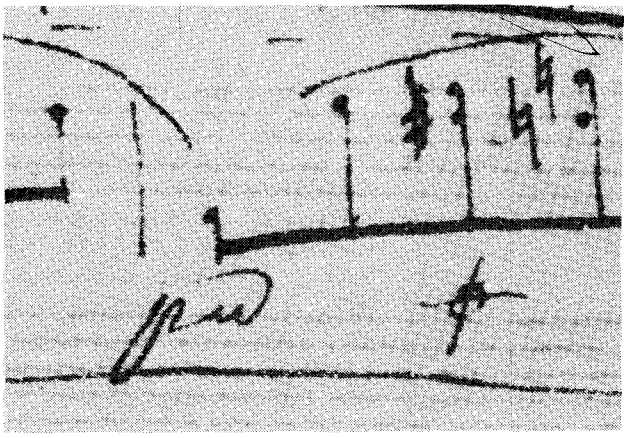


●写真２

プレリュード、オ21番のオ１小節目。写真１と比較すると、数字４のきれ込みが浅く、筆勢も弱い。マジョルカで同じ頃に完成されたポロネーズ、作品40の１は、写真１の筆跡と同系で、或いはこのポロネーズとプレリュード、６、９、12等は、同じ頃に着手された可能性がある。前頁の写真１と同様に、此の楽譜がショパンの自筆譜である証拠としてあげられるのは、$\frac{3}{4}$の書方で、フォンタナの写譜したものは、この横棒が、ほとんど垂直に近い急角度で書かれている。

説とは一致しているが、彼の説は見事に仮説としても通用しなくなっている。さて作品29の方は、又不思議な運命をもっている。現在の作品29、変イ長調アムプロムプチュは、1837年の作品であるが、イギリスでの初版のみ作品28の番号をつけられている。この事実は、イギリスの出版社が勝手に作品番号をつけたことを物語り、アムプロムプチュも又、実は作品番号を欠いていたまゝ出版社に送られたのであろう。作品30・４つのマズルカは1838年の出版であり、現在の作品番号を与えられている。作品28・29に関しては、作品番号そのものに確実性がなく、この辺りの番号をプレリュードに与える予定をたてゝいたと考えられる。事実マジョルカに行く迄の間に、彼の作品番号は34に達していたし、この時期の作品には、遺作となった作品や、マジョルカに持ち込まれて完成された作品のスケッチ類も多数あり、ショパン自身が判らなくなっていたのも当然といえる。いづれにしても、ショパンが作品番号を忘れたばかりに、しかも英・独・仏に送るコピーを自分で書く体力がなかったために、二人の友人に依頼してコピーをつくらせ、写譜者も作品番号を知らない故に記入せず出版社に送付されたのであろう。

ショパンの筆跡は実に特徴がある。数字の４の傾斜角度、小文字のａ、ｐ、ｄ等にそれぞれ

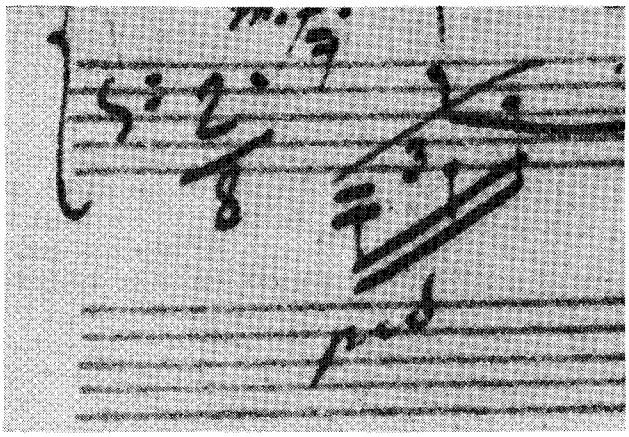


●写真３

プレリュード、オ21番変ロ長調、オ35小節目にみられるペダル記号の筆跡。ショパンの自筆譜の中には、後に挙げた２種のペダル記号の書体がみられる。おそらくは、マジョルカで書かれた唯一の曲と思われるこの曲でみられる書体は、曲全体の構成の順を知るうえで一番重要だともいえよう。ペダルのＰの字の運筆と、Ｄの筆勢と筆のおさめ方が、写真５と同じであることに注意しなければならない。ペダル記号や装飾音の多くは、マジョルカで加筆されたものが多く、全部同系色のインクで書かれているから、インクの色と筆勢と運筆等から、マジョルカの加筆を抽出して行くことができる。

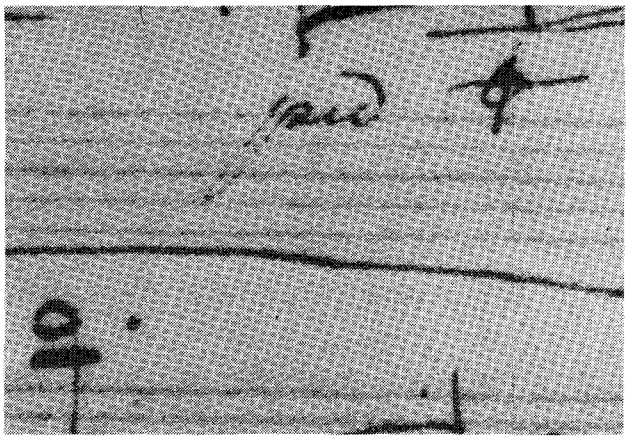
の特徴をみることができ、献呈文は、明らかにショパンの筆蹟である。又、楽譜自身の髄所にショパンの自筆譜の特徴を見ることができる。ファクシミル版でみていた時と違い、自筆譜を見た時にこの二者の間に大きな相違点をいくつか見出した。自筆譜は、縦211×横279㎜の大きさであり、各頁十四段の楽譜である。且ては白の紙であったものが、今では黄色に変色しているが、保存状態は非常に良いといえる。ファクシミルで気が付かなかった一番大きい相違点は、セピア調のインクの色が二種以上違っていることである。赤外線を用いる等、科学的な方法を用いて鑑定できるなら、もっと正確に判定することも可能だが、対称が国宝であるため、そういった科学的鑑定法を用いることができず、専ら肉眼に頼らざるを得なかったのは残念である。しかし、肉眼による観察でも、少くとも三種類のインクの色の変化を見ることができた。最も濃く、荒いタッチで、まるでスケッチのように書かれた24番等は、中でも最も興味あるもので、荒々しく書きなぐられたスケッチに、後でさまざまに加筆したことが読みとられる。全体的に見て、インキの色の淡いものが最も丁寧に書かれていること、逆に一番濃いものが荒々しく書かれ、スケッチ状であること、この場合には、淡いインクで加筆してあることが多い事実、又この二種の濃淡の中間の濃度のインクで書かれているものが多数認められること、この三種のインクの色の違いから判断するとするなら、一番濃度のうすいインクは、マジョルカで用いられたものだと判断できることがわかった。

更に又、十四段という楽譜を用いながら、例えば20番のように上部の５段をあけて書いている理由は、19番の書き直しを消した部分のインクの色が裏頁に、ファクシミルで見る以上に浸透していて、その部分には書き込めない状態になっていたためで、この例などは、明らかに20番の方が後に作曲された事実を物語っている。21番は、全体淡い色のインクを用いて居り、そのインクの色は20番に臨時記号を記入したのと同色のインクであり、又、後半で上部四段を残しているのは、22番の消した跡が浸んでいるためであることからみても、21番は、22番の後に作曲されたと判断できる。現在の楽譜で21番はCantabileとなっているが、その上に別の文字を



●写真４

才一番、ハ長調の才一小節目。前に掲げた例と数字の特徴を較べてみると、12番の太い筆勢とは又違ったものが感じられ、又、ペダルの書法が全く違っている。多くの研究者は何故か、この一番等を最も最後に作曲したものとしているが、曲全体を検討してみると、かなり早くに書かれたものだといえよう。ペダルの文字がＰもＤも他人の手になるかのように異ってみえるが、このようなペダルの書体をもつものは、部分的にではあるが、15番変二長調にもみられる。



●写真５

写真４と比較し易くするために、再度才21番変ロ長調の才３小節のペダル記号を挙げてみた。此の曲の中では、ペダル記号のＰとＤの筆勢が特徴的である。才１番のものと較べると別人の書体にみえる。同じ頃に作曲されたバラードヘ長調の筆体ともいさゝか違っているが、先に完成されたプレリュードのこの筆跡が、最も重要だといえる。

消した跡があり、ファクシミルでは読めないが、自筆譜の方では、Andanteと書いたものを消したことがよく判読できる。つまり、インクの色の濃淡が、ファクシミルで判断できないが、自筆譜を見る限り、その濃淡の示す意味が大きいことが判る。濃淡は作曲された年代を暗示しているし、両極端の濃淡の中間の色度で書かれている曲は、パリ時代、彼が最も経済的に困窮し、演奏会もできず、作品を書いても出版してくれる出版社もなく、孤独なまゝに作品を書き散らした頃の作品が、中間の濃度をもつ作品に集中していると考察できた。中間色のインクの作品の多くは、マジョルカに持ち込まれて、同地で完成されている。

1839年１月22日ヴァルデモーザからフォンタナに宛てた手紙の中に、プレリュードを送ること、、写譜の件を依頼し、又、同じ書簡の中で、別に「二・三週後にバラード、ポロネーズ、スケルツォを受けとるだろう」と記している。この文章には誰が受けとるのか主語を欠いている。ポーランド語では、動詞の語尾変化に依って主語が分る仕組みになり、ショパンの書簡では、こうした口語調の手紙が多くて、主語を欠いている例が多い。つまりこの文章から判断する限り、フォンタナが受けとることを予告しているのではなく、三人称の動詞の主語が受けとることになっている。要するに、三曲の完成を予告しているに過ぎない。この三曲は、ヘ調長バラード・作品38、２つのポロネーズ、イ長調とハ短調、作品40、の二曲、又最後のスケルツォは、嬰ハ短調作品39のことを示している。最後のスケルツォの完成は、ずっと後のことであり、マジョルカでは、結局草稿のまゝに終ったと考えてよいが、前二曲、特にバラードは、マジョルカ以前に草案ができていた点で、この作品の自筆譜にも注目しなければならない。このバラードについては、シューマンが、1836年９月13日の日記に「ショパンが、彼自身の新しい幻想曲やエチュードを演奏した」と書いている事実、又、同じ時メンデルスゾーンは「新しいエチュードとコンチェルトを弾いた」と書いているが、この時にショパンが演奏したものが、幻想曲かコンチェルトか分らないまゝに、ブラウンは、その時に演奏したものがこのバラードであるという説をたてゝいる。ショパンは、作曲した後からその曲名を考えることが多く、あるいはシューマンやメンデルスゾーンの処で演奏したものが、エチュードは別として、幻想曲

(註)29

になるのかコンチェルトになるのか未だ分らなかったということは考えられるとしても、それが後のバラードへ長調になったとするのは早計である。しかし、先述の手紙には、はっきりとバラードと記入している以上、マジョルカでバラードとして完成に近付いたものとみることができ、意志的にバラードという作品の完成を真近にみていたと考えられる。この作品の筆蹟とも照合しなければならないし、2つのポロネーズの筆蹟とて同様である。作品40の1の自筆譜は、現在マジョルカのヴァルデモーザにあるショパン記念館に所蔵されているが、この自稿のインクの色は、例の中間色のものでありパリに於いてその草稿はつくられていたものと判断することができる。

この様に前後の作品と同期に属する作品を比較しながら、作曲の時期も模索しつ、国立図書館所蔵の自筆譜の研究を進めていかなければならなかった。限られた紙面の中で、遂一、各一曲に於ける特徴を列挙してゆくことは不可能であるが、その概略を述べることにしてみたい。

彼の筆蹟の特徴については、先程から述べてきたが、私が全24曲中、特にこれはマジョルカに於ける作曲と判断した作品、第21番を中心に更に論を進めたい。第21番変ロ長調の曲について詳しく調べてみると、他の曲と違いインクの色が一色であり、楽譜やペダル記号など細かい点から鑑定して、マジョルカで加筆されたもの、つまりマジョルカ以前に或る程度推稿されていて、同地で完成されたものではなく、完全にマジョルカで着手・完成されたものであるといえよう。この変ロ長調をマジョルカの作品と断定したことの裏には、24番ニ短調の例を挙げねばならない。ニ短調の楽譜は、先述のように、実に荒々しいタッチの書法で、スケッチがそのまゝ持ち込まれたということが一目瞭然の楽譜である。この点については、ファクシミル版でもうかゞい知ることができるが、14小節から15小節に至る右手のスケールは、自筆楽譜でみると14小節の1点ハ音から4点ヘ音の間は何も書かれておらず、その音のみ濃度の濃いインクで書かれていて、現在のスケールは淡い色のインクで後で書き込まれたものである。又、この24番の臨時記号も、淡色のインクで書き込まれているのからみても、24番は、本当の意味でのスケッチのまゝマジョルカにもってゆかれ、同地で完成するために細部の加筆をしたものであることが明らかになった。又、10小節目のトリルとその後の装飾音も同様に、加筆されたものである。17小節の下降の分散和音も、先程のスケールと同様に、最上音と最下音のみが書かれたものに加筆しているし、18、19小節のスケールも加筆である。この加筆はすべて淡い色の21番と同色のインクでされている点、又、他の曲にみられる中間色のインクで書かれた曲への加筆も、すべて淡い色のインクであり、淡い色のインクがマジョルカで用いられたと判断したわけである。淡色がパリで用いられ、中間色がマジョルカではないかと仮定してみたが、楽譜自体に中間色のインクが多く、いわば付体的なペダル記号や臨時記号が、すべて淡色のものであることにより、こうした仮説は成立し得ないものだと判断できる。ところで、ブラウンの説では24番ニ短調は、Index No. 107をつけられ、No. 3.5.6.8.9.11.12.13.14.15.16.18.19.20.22.23. と共に1836年から1839年11月の間に作曲されたことになっている。この作曲年が出版年と

一致しない点は先述の通りであるが、この作品集の全24曲の作曲年を想定することは、数年を要する研究であるとみている。このブラウンのIndex のよりどころが、更に問題となる。同じIndex の中で、問題のNo. 2.4.10. 21は1838年11月から12月にかけて作曲されたものとしている。ブラウンが、この四曲に限りマジョルカでの作品とした点で、私は興味を抱き、殊更にこの四曲を調べてみたが、2番イ短調についていえば、左手の5度とオクターブの拡がりは、今のピアノではとらえにくゝ、ショパンがヴァルデモーザで用いたピアノ(PLEYELのピアニーノ6668とマジョルカ製のピアノ)を考慮に入れると、このコードは実に楽にとらえられる。というのは、現代のピアノに比較するとオクターブで四分の一インチは短かい。この点から、ブラウンは彼の説をたてたかも知れないが、実はこの曲の演奏はピアニーノでは難しく、フリューゲル・タイプでなければ難しい。又、その上このプレイエルの弦は、全部金属弦でなく、中間の54音が二弦のカットガットの弦であることを考えると、イ短調プレリュードの作曲はこの島でなされたのではないとみる方が妥当である。然も自筆譜を調べてみると、明らかに二種のインクが見られ、装飾音や左手の臨時記号も淡い色の書き込みである。第4番ホ短調と、第10番嬰ハ短調についても、インクの色の濃淡が実に鮮明で、後で書き込まれたとみることができる。ブラウンの説は、ヴィエジニスキやヘドレイ(註)30の説、ライヒテントリット(註)31の説に左右されたのではあるまいか。

自筆楽譜の研究の結果、私はこの21番変ロ長調だけがヴァルデモーザで書かれたものだとみている。この筆蹟と24番ニ短調のペダルは特によく似ていて、その点でもニ短調の書き込みが同じインクで、同じ筆体でなされたものだとみている。

このように、自筆譜を調べてみると、出版されていたファクシミル版とは比較にならない程の大差を見出すこととなった。筆蹟の鑑定はプレリュードの24曲の中のみで行うべきではなくマズルカやポロネーズ等同じ時期に作曲された作品との比較に迄及ばねばならないし、又、この曲集のいくつかは1831年以前にまで逆のぼる必要があるという説もあるだけに、1839年以前の作品全般について拡大していかなければならない。この論文は、国立図書館蔵のプレリュード自筆譜の範囲を出ていない中間報告であることを断っておく。

(註) 1 Polskie Wydawnictwo Muzyczne

(註) 2 Wladyslaw Hordynski

(註) 3 Bonawentura Lenart

(註) 4 Breitkopf & Hartel, Leipzig

(註) 5 Camille Pleyer

(註) 6 Julian Fontana (1810～69)

(註) 7 Korespondencja Fryderyka Chopina Tom I pp. 334

(註) 8 Pierre Wolf (1810～1882) ジュネーブ音楽院の教授・ポーランド出身のピアニスト。

(註) 9 Probst Kistner

(註) 10 August Leo パリの銀行家、ショパンに金銭面の援助をしていた。モシェレスの親籍という。

(註) 11 Maurice J.E Brown; Chopin an Index of his works in Chronological order. 2nd Ed. 1972

(註) 12 AD. Catelin et Cie, Editeurs des Compositeurs rêunis.

(註) 13 Wessel & Co. Importers of Foreign Music and Publishers of all the works of Chopin, Kuhlau, Hummel &. c.

(註) 14 Korespondencja Fryderyka Chopina Tom I. pp. 342

(註) 15 Joseph Christoph Kessler (1800～72) ドイツ生れの作曲家、ピアニスト、1820年ポーランドに来て、ポトツキ家の知遇を得た。エチュード、歌曲、合唱曲等の作品があり、ワルシャワではショパンと交遊があり、彼の作品31の24のプレリュードがショパンに献呈されている。

(註) 16 Schlesinge, パリの出版社。CATELIN の版権をゆづり受けた。

(註) 17 DR. J. Pulikowski

(註) 18 Mgr. Maria Prokopowicz

(註) 19 Prof. Jerzy Zulawlew (1886～)ポーランド生れのピアニスト・ミハウォスキの門下。現在ワルシャワ音楽院の名誉教授。

(註) 20 Lucjan Fajer

(註) 21 Zbigniew Czeczot

(註) 22 Andrzej Zacharias

(註) 23 Rocznik Chopinowsk X, TiFC Warszawa 1976～1977. pp. 43～58.

(註) 24 24 Preludes, Faksymilowane Wydanie Autografow F. Chopi na Slowo wstepne

(註) 25 Maurice J. E. Brown 前出著 pp. 113

(註) 26 〃 pp. 95

(註) 27 Wierzynski

(註) 28 William Murdock; Chopin his life.

(註) 29 Korespondencja Fryderyka Chopina Tom. I. pp. 334

(註) 30 Arthur Hedley

(註) 31 Hugo Leichtentrit.「楽聖ショパン伝」道本清一郎訳、淡海堂・昭和18年4月15日発刊 pp. 106

参考文献 Krystyna Kobylanska; Rekopisy utworow Chopina. Tom Ⅰ, Ⅱ, TiFC. PWM. 1977

1. Kornel Michalowski; Bibliografia Chopinowska 1849～1969 TiFC PWM. 1970
2. Ballada F-DUR Faksymilowane wydanie autografow F. Chopina. PWM. 1952.
3. Korespondencja Fryderyka Chopina Tom I. PIW. ed. Bronis law Edward Sydow. 1955.
4. Luis Ripoll; Chopin's Pianos. Mossen Alcover Press. 1958.
5. Rocznik Chopinowski IX TiFC. Warszawa 1975
6. Rocznik Chopinowski X TiFC Warszawa 1976～77.

(本学教授—音楽学)